

Pray
for...

尾上
史郎

『チェルノブイリの
祈り』と僕

僕が生まれる二か月ほど前、当時はまだソ連の一国であったウクライナにおいて、チェルノブイリ原子力発電所が爆発するという事故が起こった。それにより放出され、拡散したおびただしい量の放射性物質は、世界中の人々を巨大な不安の渦に陥れ、恐怖させた。周辺の大地からは、いまだ高濃度の放射線が検出されている。チェルノブイリ原子力発電所事故は、史上最悪の人災として、深く記憶に刻み込まれることとなった。

僕に影響を与えた一冊は、そんな「最悪」の中に生き、あるいは死んでいった人々の物語を収めたインタビュー集『チェルノブイリの祈り』である。インタビューは、著者スベトラナ・アレクシエービッチが事故後十年経ったベラルーシで、「最悪」を経験した人々から集取したものだ。モノログ形式で語られるそれらの物語はあまりに生々しく、痛みに満ち満ちている。

ロシア文学に興味を持ち、ロシア語を勉強していた僕は、『チェルノブイリの祈り』のことをロシア人の書いたブログを読んで偶然に知った。しかしその当時、すでにこの本は絶版となっていて、手に入れることは難しかった。それを手に入れ読むことができたのは、皮肉にも、二〇一一年三月十一日に起きた福島第一原発での事故がきっかけであった。

この本が復刊されることを知り、僕はすぐさま予約注文をした。そしてそれを受け取ると、すぐにページをひらいて人々の物語を読みはじめた。しかし一ひとりのインタビューを読み終えたところで、僕は本を置いた。その先を、読み進めることができなかつたのである。

冒頭で語られていたのは、ある女性の「最悪」の日々であった。彼女は妻で、夫は消防士をしていた。その夫が、原子力発電所が爆発してすぐ、最前線で処理作業にあたって被曝をした。

多量の放射性物質を体内に取り込んだ彼は、その結果、自身が周囲に放射線をふりまく「放射性物体」となってしまった。病室に置かれたオレンジが、ものの数時間でピンクに変色してしまうほどであった。ベッドに横たわる夫の姿は変わり果て、当時夫との子をおなかの中に宿していた妻は、当然のことながら遠ざけられた。それでも彼女は、病院の関係者に賄賂を渡してまでして、夫のもとに通い続けた――。

読み進めていくうち、胸の内が空っぽになっていくのを感じた。思考もうまく巡らず、みぞおちの辺りが苦しくなった。続きを読む覚悟ができ、再び本を手にしたのは、それからほとんど半年経ってからのことであった。

科学技術やシステムといったものへの妄信、過信。それらの陰で蔑ろにされ、使い捨てられた生の数々。戦争とは異なる、勝利のない戦いを前にしていただく虚無感。生の輝きを呑み込むほどに濃密で、質量さえ感じられる死の影――。

「チェルノブイリ」と呼ばれるようになった人、時代は、二十五年という歳月を越えて「フクシマ」という時代につながり、国境を越えて僕に語りかけてきた。

原子力発電がどうこうという話ではない。原子力発電というものに希望をいだき、その実現のために人生をかける人たちのことを否定しても意味がない。しかし同時に、他者のいただく痛みを一部分だけでも共有し、その人たちとつながり合うことのできない人生になど、なおさら意味はないのではないか。

この『チェルノブイリの祈り』という一冊は、それまでどこか傍観者気分であった僕の考えを変えてくれた。チェルノブイリの叫びを聞いていた僕は、いつしかその中に祈りを見だし、自らもまた祈るようになっていた。

ただ単なる傍観者であってはならない。痛みに苦しむその〈当事者〉であろうとしなければ、悲劇は繰り返されて、語り継ぐことは無意味と化し、やがては人生や歴史といったものも価値を失ってしまうことだろう。苦しみを苦しみのままで終わらせないためにも、新たな苦しみを生み出さないためにも、〈当事者〉としてそれを語り継いでいくことが必要なのであり、まさにそのことにこそ、物語の価値が存在しているのではないか。僕がこのエッセイを書く意味もまた、きっとそこにあるに違いない。

チェルノブイリの祈りが、この世に生きる人すべての祈りとなればいい。